

2009年2月18日勉強会議事録

ボードリヤール『消費社会の神話と構造』

第三部 マス・メディア、セックス、余暇 IIから結論まで

発表者：市川・久富

参加者：嶋田・岩瀬・石堂・市川・安達・古川・嶋田紫・久富

記録者：久富

まず、メンバーが考えてきていた次回の課題本の候補が挙げられた。

挙げられた本は・・・

《新書》

高坂正堯『国際政治』・見田宗介『現代社会の論理』・福田歓一『近大日本の政治思想』・ヤ山崎正和『柔らかい個人主義の誕生』・野家啓一『物語の哲学』・藤原正彦『国家の品格』・関岡勝『拒否できない日本』・丸山圭三『言葉とは何か』・鈴木孝夫『ことばと文化』

《難しい系》

岩井克人『貨幣論』・ジョセフ・ナイ『国際紛争』・アンダーソン『想像の共同体』・A・ゲルナー『民族とナショナリズム』・スティグリッツ『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』・E・H・カー『危機の二十年』

結果、次回の課題本は、見田宗介『現代社会の論理』に決まった。

【肉体は女性のものか】

【医療崇拜―「からだのかたち」】

○健康が競争の論理に組み込まれる

⇒“心理的要素が体の特徴に出る”という社会的認識ができたということでは。

例：「単位を落として気分がブルーになる」

⇒肉体が個人のモノ化することによって、ヒエラルキーに組み込まれる

○(p206.19～) 潔癖症とはどこからくるのか・・・

菌が目に見えるわけではないのに過剰に意識する。とにかく“除菌”をうたい文句にしている商品が多い。潔癖症が行き過ぎてしまっているのも問題ではないか。除菌の意識の根本には宗教が関係しているのではないかという意見が出た。人間が清潔になりたいという意識が宗教と結びついたのではないか・・・ボードリヤールはそれすらも社会の影響があると言うだろうが・・・。日本のミソギ・ケガレという意識もあるのでは。日本人は世界的に清潔観念が強いということもあるのでは。

○「秘蹟（神の恵み）」とは・・・？

肉体＝超越したモノ⇒それを直す医者が尊敬を集めるのでは・・・

医者（神）の言うとおりにしていれば、自分の体は救われるということではないかという意見が出た。結局、“肉体”が“神”に取って代わっただけで、構造自体は変わっていない。

マナ＝未知のもの  
自分の体＝未知のもの } を操る医者が聖職者となる

#### 【痩せたいという脅迫観念―「からだの線」】

女性の美しさの基準は定められていない。文化間で違ってきたりするはず。しかし“現代的美しさ”とは「ほっそりとしてしなやかな体つき」以外に考えられない。「太った体つき」が美しいということにはならない。⇒肉体が記号化している

#### 【セックス交換規準】

#### 【広告における象徴と幻覚】

#### 【性器つき人形】

○“性”とは相手がいてはじめて成立するもの。

ルネサンス期では性が常識として、美の象徴として一般的に認められていたのではないか。一方現代では、アダルトビデオやエロゲーなど、性が個人的なものになっているのでは。

○現代の性観念・・・性はいやらしいものという感覚がある。また、電車の吊り広告や書店・コンビニの陳列など、そこら中にありふれているがゆえに、慣れてしまい反応しなくなる。そこからSMなど極端な例に走るのでは。

⇒“性の亡霊”・“死のしるし”・・・

### III 余暇の悲劇、または時間浪費の不可能

○（p233～）“余暇を疎外された労働のイデオロギーにしてしまう”とはどういうことか？この場合のイデオロギーは何かを隠しているのか？という疑問が出た。

そこはそのような意味ではなく・・・

一見、余暇自体、自由に自分が選んでいるように見えるが、別の見方をすれば強制的（労働的）に時間を浪費していることになる。つまり、余暇すらも労働となるのではないかという意見が出た。

○ (p223～) “道徳的倫理とは?”

このような例が出された↓

- ・ディズニーランドなどで、「せっかく私と来てるんだから楽しんでよ」や、「せっかく・・・に来たのに・・・に行かないなんて」
- ・行楽客が同じ場所へ押しかける。
- ・修学旅行といえば京都、京都といえば三十三間堂、などコード化している
- ・絵を見てどうかということは問題ではなく、“ループルに行く”ということだけで一つのステータスとなる。
- ・パック旅行・・・7日間をいかに有効的に使うか⇒強迫的な観念

○ “余暇がある” こともステータスとなる⇔労働する (余暇を取らない) ことすらもステータスとなり得る